

BUNGAKU 1995

文学 1995

日本文芸家協会編

胸の香り	宮 本 輝	樹霊	稲 葉 真 弓
光る藻	吉 村 昭	聖岩	日 野 啓 三
古屋にて	吉目木 晴彦	死にゆく姉	大 原 富 枝
黙っているお袋	小 川 国 夫	船	内海 隆一郎
触れる袖	富岡 多恵子	片冷え	河野 多恵子
ありふれた一日	佐藤 洋二郎	探求者	高 橋 陸 郎
路上	小 島 信 夫	雀隠れ	眞 鍋 呉 夫
巣づくり	笠 原 淳	スネーク	萩 原 葉 子
シビレル夢ノ水	笙 野 頼 子		

文学 995

日本文芸家協会編



講談社

ぶんがく
文学 1995

一九九五年四月二〇日 第一刷発行

編者——にほんぶんげいかきようかい日本文芸家協会

©Nihon Bungeika Kyokai 1995, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二二

郵便番号一—二—〇一

電話——出版部 〇三—五三九五—三五〇四

販売部 〇三—五三九五—三六二二

製作部 〇三—五三九五—三六一五

印刷所——豊国印刷株式会社

製本所——島田製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-117095-3 (文1)

PIANGI CON ME(「今日を生きよう」)

by Norman David Shapiro/Guido Cenciarelli/Mogol(日本語詞:中西禮三)

©BMG ARIOLA S.p.A.

Assigned for Japan to Nippon BMG Music Publishing Inc.

SOMETIME AGO(Lyric Version)

by CHICK COREA/NEVILLE POTTER

©1970 by LITHA MUSIC

The rights for Japan assigned to FUJIPACIFIC MUSIC INC.

JASRAC 出9551001-501

まえがき

川村 湊

この「文学1995」(のシリーズ)は、年刊の短篇小説アンソロジーとしてすでに定着した評価を受けている。私は今回初めて編纂の作業に参加したが、小説家、評論家をまじえた編纂作業の過程は面白かった。ページ数の制限のため、この一年間に発表された多くの作品の中から一冊にまとまるだけの分量を、大鈍^{おおな}を振るって、取捨選択というよりはもっぱら「捨てる」ことを中心に編纂しなければならぬわけで、涙を吞んで多くの作品を「削る」作業を「面白い」といつてしまつては語弊があるのだが、作品の評価にそれぞれの編纂委員の文学観や個性などが仄見える感じがして、私にとつて興味深い体験だったといえるのである。

もちろん、具体的な編纂過程をここで詳述することはできないが、たとえば笹野頼子氏の作品では、芥川賞を受賞した「タイムスリップ・コンビナート」と「シビレル夢ノ水」の二作品のうち、どちらを採るかが論議された。このアンソロジーが日本文学の一年間の代表的な作品(話題作という意味も含め)を集めるということに眼目があるならば、芥川賞受賞作を採用するべきだろうが、作品的にはむしろ「シビレル夢ノ水」の方を支持するといった意見が出され、選考の場でちよつと論議になったのである。

私としては「タイムスリップ・コンピナート」は芥川賞作品として読者の目に触れる機会も多いので、ここではむしろ「シビレル夢ノ水」の方がよいという意見であり、迷い猫の話から、猫の残していった蚤の話となり、その蚤が巨大化してゆくという「シビレル夢ノ水」の奇想天外な話の方に、私は笙野頼子氏のより個人的な作品世界の展開が見られると思ったのだが、こうした「奇想譚」に案外支持が多かったということに、私は意外さと面白さを感じたのである。小説の形や理念は、現代において大きく変貌を遂げつつあるように思える。しかし「小説を面白がる」という感性だけは、結局のところ「小説」という形式がある限り続くようである。古典的なものも、アバンギャルド（前衛的）なものも、「小説の面白さ」という一点において、ここでは選択されているのである。

笙野頼子氏の作品が「前衛」的だとしたら、同じように新鋭作家といえる吉目木晴彦氏の「古屋にて」は、古典的ともいえる短篇小説のツボを心得た作品であるといえるだろう。若い夫婦のちよつとした感情的なくい違いがテーマとなっている。夫は工場の一時期帰休のためぶらぶらした生活を送り、妻は小さい子供を抱え、そんな夫にちよつとした不満のようなものを感じている。夫婦は子供を乳母車に入れ、そろって買物に行く。ついでに新聞チラシにあった「古屋あり」の売り地を見ることにする。何気ない、ありふれた現代の若夫婦の一日を淡々と描いたものに過ぎないのだが、古屋に棲みついていた野良猫の親子の突然の出現で、夫婦の間に流れていた感情の行き違いは解消される。

とりたてた事件が起きるわけでもなく、幻想や奇想が紡ぎ出されるわけでもないが、笙野頼子氏の小説に出てくる「付喪神」（物体が化身した妖怪）としての役割りを「古屋」あるいは「猫の親子」が果たしている。笙野作品の中の「猫」と吉目木作品の中の「猫」とを見比べてみる

と、前衛的であれ古典的であれ、現代人の動物や物体（「付喪神」的なもの）に対する関心は、ちよūdとその孤独感と比例するものであるように思える。

「猫」ばかりではない。現代の短篇小説には、登場する人間に関わるいろいろな小動物が、大きな位置を占めている場合がある。笠原淳氏の「巣づくり」では、マンションの七階の部屋のベランダに「巣」を作っているらしい「鳩」と、その部屋に住む夫婦とのちよūtとした緊張関係を孕んだ話である。人間の営む巣と、鳩の作る巣との共存し難い関わりが、小説の幻想的ともいえるラスト・シーンに見事に収斂されてゆく。

「蛙」が出てくるのは吉村昭氏の「光る藻」である。戦後の食糧難の時代を振り返る語り手の記憶の底に浮かびあがってくるのは、父親は戦死し、母親は病死したという孤児の十六歳の少年のことだ。彼は〈私〉の兄の経営する工場で手伝いながら、明るい夜には溜め池で食用蛙を釣っては蛋白源としてみんなに供していた。「猫」「蚤」「鳩」「蛙」という小動物たちは、日本の短篇小説の伝統的な登場人物（？）たちなのである。

稲葉真弓氏の「樹霊」も動物ではないが、まさに「付喪神」の世界を描いたものといえるだろう。庭付きの家を売り払い、マンションの一室に独りで住んでいる老女。彼女は植物のつもりで骨董屋から仏像や石仏をクレジット・カードで買ってくる。それを和室の部屋の^{つもとが}中いっぱいに置いて、植物のつもりで毎日をやって生活している。「付喪神」はまた「九十九^{もが}髪」でもあって、老女の髪を意味する。土や根から切り離された生活は、人間を一種の「付喪神」、妖怪のような存在へと変えてしまうようである。

佐藤洋二郎氏の「ありふれた一日」は、一日じゅう「土」にまみれて働く土建業の従業員の話だ。東京の近郊都市の工事現場で働く男と女たちの「ありふれた一日」を、やや乾いた文体で描

き出すのだが、もちろんそれは比喩としての「土」や「根」からは切り離された生活にはかならない。崖崩れで新築の家と夫をいっきよに失った未亡人は、義母の反対を押し切って再婚した。息子はそんな母親に「女」を感じ、東京に出て工事現場の作業員となった。「土」にまみれながら、根生いの土地から切り離されているという皮肉で、逆説的な人間の生。それはフイリピンやパキスタンから不法入国した外人労働者の立場と本質的に同じものといえるだろう。「根」を失った者たちの「ありふれた一日」は、たぶん今日も繰り返されているのである。

内海隆一郎氏の「船」は、小学校六年の少年の「労働」を描いたものだ。父に棄てられ、母が死んで祖父と妹との三人で暮らしている少年。少年は港で釣り客の使い走りをしたり、片腕のない漁師の蛸壺漁の手伝いをして生活費を稼ぎ出そうとする。ここにある貧しさは、現代がすでに通り過ぎてしまったもののように思えるが、それは船酔いに似て、容易に克服できるものではない。少年の普遍的な悲しみが、あてどなく漂っているような作品なのである。

もう一つ、このアンソロジーに収録された作品群の中で目立つ特徴は、肉親（や知人）の「死」を描いたものが多いことだろう。宮本輝氏の「胸の香り」、小川国夫氏の「黙っているお袋」、富岡多恵子氏の「触れる袖」、大原富枝氏の「死にゆく姉」、眞鍋呉夫氏の「雀隠れ」は、それぞれに父母、母、知人、姉、父の「死」を描いたものである。もちろん、「死」という現象そのものは似通っている、その死者と残された生者にとってその「死」は絶対的なものであり、固有で独自なものにはかならない。人間一人一人の生が独自のものであるように、その「死」も固有の一回きりのものでしかない。「死者何百人」とか「何千人」とかたやすく私たちは口にするのだが、文学はそうした「死者」を数字から固有の体験へと還元するものなのだ。

宮本輝氏の「胸の香り」は、母親を裏切っていたかもしれない父親と、そうした夫の背信を疑っていた母親との「死」を、息子の眼から見たものである。夫と同じ体臭を持ったパン屋の若主人。母親はそれを自分の夫の隠し子ではないかと疑っている。しかし、それは必ずしも夫の背信に対する恨みや憎しみの感情を伴ったものではない。死者たちの持っていた体臭。はかなく、消えやすい。匂い。こそが、生者の生者たる証^{あかし}であり、また懐かしい故人の個性にほかならないのである。

小川国夫氏の「黙っているお袋」は、老母の死を前にした三人の兄弟の言動が話の中心になっているが、次男である「私」の妻と、三男の弟との不倫の関係が語られていて、兄弟仲をいつも心配していた母親の言葉が幻聴のように聞こえてくるというものだ。宮本作品、小川作品に共通しているのは、「家」や「家族」の紐帯^{ちゆうたい}と「性」的な繋がりとの絡み合いということであって、「性」は家族という関係を繋ぎ合わせる根本的な力であると同時に、既成のそうした「家族」や「家」を壊してしまう力でもある。そうした認識が、この二つの作品を単なる家族小説ではない、根源的な「深い」ものとしているのである。

富岡多恵子氏の「触れる袖」は、まさに「袖すりあうも他生^{たじよ}の縁」というべき、人生の間に何度か集中的に接近した「Aさん」と呼ばれる人物について書いている。「Aさん」は「わたし」が昔出した詩集を読んだということで手紙をくれた人物で、愛読者あるいは文学ファンと称すべき人だった。彼女は人と知り合うと集中的に手紙を出すということを繰り返す人で、知り合いとしてはやや負担を感じさせる人物だった。「わたし」は文楽の劇場で彼女を見かけたが、声をかけずに帰ってきた。「Aさん」はミネラル・ウォーターのビンを持ち、深い帽子をかぶり、男のような服装をしていた。

とりわけ深い付き合いがあったわけではないのに、何となく気がかりという「他人」がいる。へわたしにとつてへAさん」はそんな存在だった。ましてや彼女が縊死し、へわたし宛ての手紙を残していたということになれば、なおさらその「他生の縁」の「一生」が気にかかるのである。「抑制と過剰のアンバランス」を抱えた人間同士の関わり合いは、「死」によってようやくバランスを取り戻すことになるのだろうか。

大原富枝氏の「死にゆく姉」は、親族からも他人からも愛された「姉」を看取った妹の「私」による一人称小説である。美しく、家族思いの姉だったが、一般的な意味では決して幸福な人生を送ったわけではなかった。二十歳で結婚した相手から伝染する病気を移された彼女は三カ月で離婚したが、病気のため卵巣の機能を喪失し、子供の産めない体となった。妹の結核の看病のために再婚する時期が遅れた彼女は、女の子の一人いる男性と再婚したが、その義理の娘は脊椎を損傷し、生まれた孫をほとんど母代わりに育てなければならなかった。過労で片目を失明した彼女はやがて両眼の光を失い、そして死んでしまったのである。

この不幸な姉を、しかし「私」は必ずしも不幸であったとは書いていない。美しかった姉は、その美しさによって人々から愛されていたし、優しかった分だけ人々の優しさに囲まれていたといつてよい。むろんそこにはカトリックとしての宗教的な感情も込められているのだろうが、不幸といったことは別の次元で「美しく」生きた「姉」の姿が、ここでは印象深く描かれているのである。

「雀隠れ」は眞鍋呉夫氏の久々の小説作品である。標題の「雀隠れ」は俳句の季語で、雀がその姿を隠せるほどの草叢のことを示す言葉だという。父親の死から小説が始まるのだが、茶毘の時にせいぜい二、三センチしかなかった雑草が「雀隠れ」ほどになっている。そのことに気がつい

た時、語り手の〈私〉は急に目頭が熱くなるのを覚えたのである。しかし、この小説は父の死というよりは、むしろその後の残された土地の売買や、それに尽力してくれた知り合いの〈魚住さん〉という不動産屋さんのことを語るほうに主力を置いているようだ。父親は生活能力のない〈私〉が帰郷のために送ってもらった金を「また使いこむと困る」といつていたという。確かに、相続した土地や書画などの処理に関して、〈私〉のやり方はいかにも心許なく思われるのである。「人間、死んだら、どこに、行くのだろうか」と、思わずアボリジニ（オーストラリアの先住民族）の老人に問うのは、日野啓三氏の「聖岩」の語り手の〈私〉である。唐突なそんな問いに、驚くのもなく、老人は黙って片手の人差し指を空に向けた。「では、空に上がって、何になるだろう」と続けた問いに、老人は小声で笑いながら、一語、「風」^{（ウインド）}と答えるのである。もちろん、「聖岩」の語り手である〈私〉も、こうした「死」に対する答えを求めるために、オーストラリアのエアーズ・ロックまで旅行に行ったわけではない。ただ、彼は先住民族の寡黙な老人ならば、こうした根本的な問いに答えてくれると思っただけからだ。人は死ねば風になる。こうした智慧から遙かに離れたところに、現代の日本の小説があるように思えるが、しかし、それもあるいは見かけほどの違いはないのかもしれない。

小島信夫氏の「路上」、河野多恵子氏の「片冷え」、高橋睦郎氏の「探求者」、萩原葉子氏の「スネーク」などの作品は、予め書かれる「解説」^{（あらかじ）}めいた文章を拒否してしまうような作品群といえるだろう。それだけ、これらの小説は、自分自身以外の言葉や文章で置き換えられることを肯んじない作品である。主題や素材によって括ったり、分類したりすることの困難な作品であり、要約による紹介など不可能に近い。小島信夫氏の「路上」は、その作中にユダヤ人作家でイデッシュ語で小説を書いたジンガーの「Old Love」という小説のストーリーが物語られ

るが、それは〈老小説家〉の〈彼〉が現に書いていると思われる「路上」という作品と入れ子細工になっている。読者はその巧妙で融通無礙な「語り」を楽しむべきだろう。

河野多恵子氏の「片冷え」は、体の片側だけ冷えるという、体の変調を感じる中年女性の物語であり、高橋睦郎氏の「探求者」は「フィスト・ファック」という過激な同性愛的行為によって死に至ったという、いわば〈性〉の求道者、探求者の物語であり、萩原葉子氏の「スネーク」は、七十を越えて、危険で難度の高いダンスの大業に挑む女性^{おむす}が主人公の物語である。これらの小説から強いて共通項を取り出してみれば、それは「肉体」や「身体」の問題が作品世界の中で、きわめて重要視されているということだ。河野氏の作品において「片冷え」という肉体の変調が、恋愛関係にある男性との距離に関わっていることは確かである。高橋氏の作品においては、過激な性的快楽を求める行為は、ほとんど殉教者の相貌を帯びるまでに苛烈で壮絶なものとなっている。萩原氏の作品のダンスのレッスンも、もはや正常な意味でのスポーツや芸術の域を越えて、むしろマゾヒスティックな肉体感覚といえるのかもしれない。そういう意味で、それらは人間の肉体としての存在、身体存在がぎりぎりの極限的なところまで押し詰められていることを象徴する時代の小説作品ということになるのかもしれないのである。

目次

まえがき

川村 湊 i

胸の香り

宮本 輝 7

光る藻

吉村 昭 19

古屋にて

吉目木晴彦 29

黙っているお袋

小川 国夫 45

触れる袖

富岡多恵子 56

ありふれた一日

佐藤洋二郎 68

路上

小島 信夫 96

巣づくり

笠原 淳 111

シビレル夢ノ水

樹靈

聖岩

死にゆく姉

船

片冷え

探求者

雀隠れ

スネーク

笙野頼子

稲葉真弓

日野啓三

大原富枝

内海隆一郎

河野多恵子

高橋睦郎

眞鍋呉夫

萩原葉子

122

148

165

182

203

222

240

252

273

装幀

下村哲也

文学
1
9
9
5

